

Q&A 先月の技術相談から

エノキタケとえぞ雪の下

Q: 「えぞ雪の下」という名前で売られているきのこエノキタケは、見た目は全然違うのに同じ種類のきのこ聞いたのですが。

A: 「エノキタケ」として売られているきのこは真っ白でひよろ長く、傘も小さく、もやしのように見えますね。ですが野生のエノキタケは、傘は直径2～8cm、黄褐色～栗褐色で表面は著しい粘性を有しており、柄は長さが2～9cmで上部は淡黄褐色、下部は黒褐色、短い密毛におおわれピロッド状になっています(写真1)。これが、本来の野生のエノキタケの姿で、「えぞ雪の下」という名前で売られているきのこです。野生のエノキタケは種々の広葉樹の切り株や枯れ木、倒木などに、主に晩秋から初春に発生し、積雪の中で発生を見ることがあり、「ユキノシタ」とも呼ばれます。英名はウィンターマッシュルームです。

現在、全国で栽培されているエノキタケの品種の大部分は長野県で育成されたものと考えられています。そのルーツとなったのが昭和30年代に品評会で選ばれ、長野県で初めてエノキタケの品種として認められた「信濃1号」と言われており、その後の品種は「信濃1号」の栄養菌糸体の分離により派生したと考えられています。当時、消費者は野生のものや着色したものを好まず、暗室で栽培されることにより、柄が長く徒長し、全体が白色のものを好んだようです。このことからエノキタケの品種は、白く、茎が

太く、収量が多いものが選抜され、昭和50年代には多くの品種が生まれました。これらはいずれも茎の基部3cm程が淡褐色に着色し、傘の色もやや着色する品種で、「白色系」、あるいは「淡色系」と呼ばれ、着色を抑えるため遮光栽培する必要性がありました。

その後、従来品種の交配、あるいは従来品種からの突然変異により、茎の着色も無く、傘の色も従来品種よりも白い「純白系」とよばれる、光照射により着色しない遺伝的に白い品種が育成されました(写真2)。純白系品種は品質の良さ、日持ちの良さから、エノキタケの品種は昭和63年以降に全面的に純白系品種に切り替えられました。現在販売されているエノキタケはこのような経緯を経て開発された



写真2 純白系エノキタケ



写真3 えぞ雪の下



写真1 野生のエノキタケ
(旭川きのこの会 北郷興亜氏提供)

ものです。

一方林産試験場では、エノキタケの野生株を交配することにより、野生エノキタケ本来の風味を持ち、旨味に優れ、歯ごたえがあり適度なヌメリがある野生型エノキタケ「えぞ雪の下」を開発しました（写真3）。「えぞ雪の下」は地域資源のカラマツ、トドマツのおが粉で栽培が可能で、現在は愛別町を中

心に栽培されています。

生産量が少ないため、見かける機会は少ないかもしれませんが、見かけた際はエノキタケとの違いを是非お試しください。

(利用部微生物グループ 東智則)